

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十六年六月十五日
第三種郵便物認可
發行（毎月一回・十五日発行）

（通第三八四号）

次

人生と信仰・信仰と人生……………	近角常観……………	(1)
歎異抄第三章（続）……………	池山榮吉……………	(5)
真実の道……………	山本晋道……………	(10)
御一代記聞書抄（続・二〇）……………	井上善右エ門……………	(14)
63.9.10. ② 凡骨日誌抄 ^{1訂の我} （十）……………	西元宗助……………	(16)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(19)
源信僧都讚仰……………	花田正夫……………	(22)

慈

光

第三十三卷 第六号

人生と信仰・信仰と人生

近角常観

かつて人生と信仰と題して人生諸種の問題が、最後に信仰に入つて解決せられることを話したことがあつた。ここに信仰と人生と題して、絶対の信仰より人生諸種の活動が健全にかつ秩序よく実現することを申さねばならぬ。彼の「人生と信仰」を語つた時は、丁度戦後（日露戦争）にして、一般が煩悶懊悩を極め、青年は悲観厭世の思想を抱きて、文学に、思潮に、渾沌として未解決の時であつた。而して上下共にその解決を求めつつあつた。そこでこれ等の諸種の思想が、信仰に入つて最後の帰結を得ることを叫んだのであつた。

さて現今の大勢を見るに、或意味に於て一步を進め、むしろ不完全なる解決をなし、絶対ならざる信念に立ち、不健全なる人生、無秩序なる社会を実現せんと試みる様になつたのである。換言すれば、かつて人生諸種の問題が信仰に入りて解決せられるものとして、少くとも思想上の根底より解決せんと試みられたものが、その思想が不徹底な

ため、不健全なる人生を実現せんとし、又その信仰が真に絶対到達せざるために、秩序ある人生の実生活を実現することが出来ぬうらみがある。しかしこの両者はもとより一體の問題にして、前者は人生より信仰に入る問題で、後者は信仰より人生に出ずる問題である。もし人生より進みて信仰の奥底に達したるときは、必ず人生に活躍せざるべからざる次第である。人水に沈みてその底に達するものは、必ず浮び来る如くである。しかるに沈みて浮び来る所から以て、足がその底に達せずして、水中に溺れつつあるからである。人が信仰に入りて絶対の奥底に達せざる時は、必ず信仰に溺れ、思想に沈みて、人生に軽々と浮かび得ないのである。言い換えれば、信仰にして人生に活躍することの出来ぬのは、その信仰が達すべき所に達せぬからである。道元禪師が心身脱落と云われたときに、如浄禪師が脱落心身と附加えられたということである。心身脱落、脱落心身、実に云うべからざる味がある。今また、人生と信仰、

信仰と人生と云わんと欲するのである。真宗においても行信の關係またこれに外ならずである。曰く、念仏信心、信心念仏である。実に無限の意味がある。真俗二諦の關係またこれに外ならずである。人生の問題は結局真諦の一によりて解決せらるるもの故、その真諦の信仰の一により、俗諦、人生の諸問題も皆解けるのである。しかるに報謝の念仏、俗諦の経営が信仰の一より流れ出すことなくして、真諦信仰の上に附加えられた如く、別々になる所以は、真諦の信仰そのものが絶対の信仰でなきゆえに、信仰それ自身より人生俗諦に流れ出ることが出来ぬのである。言い換えると真諦信仰にして、報謝経営の上に活動せざる所以はそもそも信仰そのものが人生全面の力となりて居らぬからである。人生すべてのものがすたりておらぬからである。選択集に所謂、あらゆる自力諸行を捨閉擱抛されて居らぬからである。

そもそも選択集と教行信証との關係、即ち法然聖人と親鸞聖人との關係、またこれに外ならずである。選択集で言へば、あらゆる諸行をすてて念仏の一に帰するのである。発菩提心、持戒持律、孝養父母、造塔起像、皆一々えらびすてて、念仏を唯一と選びとられたが選択本願である。選択集は浄土の三経、及び浄土の祖師、特に善導一師をもつて書かれている。而も御行状も南無阿弥陀仏、往生之業、

念仏為本、日々、称名七万遍である。しかるに親鸞聖人にいたりては、弥陀にたすけられまいらすべしと信するほかに別の仔細なきなりである。唯念仏しても、口に現れた時はすでに報謝である。一代藏経も、亦浄土真実の教行信証を顯わしたの外はない。信心即ち浄土の大菩提心である。本願即ち第一義乗である。無戒名字の比丘にして、清浄真実の家庭を実現し、父母孝養のためにとて念仏一遍にても申したることなき信心なればこそ、その信心の上よりは朝家の御為め、国民のため念仏すべし、世の中安穩なれ、仏法弘まれとの御報恩のための念仏が出てくるのである。雑行雑修を捨てねばならぬ、現世祈禱をしてはならぬと制せねばならぬ様なことでは、信仰が未だ徹底しておらぬのである。捨てよと言わずとも、一心専念のものが、一分たりとも自分が善が出来ると考えられるものか。罪業深重と頭が下りたるものが、善を雑えられるものか。煩惱具足の凡火宅無常の世界と自覚したものが現世の幸福を祈るべき。されば一度大悲の光明に攝取せられたものは、冥々の間に諸仏菩薩、諸天善神の護持養育を得るのである。観音勢至の引導をこうむるのである。大聖権化の善巧方便を得るのである、南無阿弥陀仏々々々々々々々々々々。

信仰はわが安宅なり、世路はわが本務なりと考えて、一面に仏陀は我を救い給うと信じつつ、一面その職務に忠実、

一点の浮泛なく勉めつつあった人があった。而して如何にしてもその職務が勤まらぬに泣き、わが力の足らざるを悲しんだ。これはつまり真実の信仰を得たるつもりなれども未だ徹底して居らぬからである。言葉だけで仏陀が救い給うと云つても、仏陀の大悲の下に、我身の罪悪が自覚されて居らぬからである。あたかも手に救済の繩を握りながら、足は必墮無間と落ちて居らぬからである。浄土は樂しむと聞いて、参らせて下さると自らきめ込んで、安心は出来た、信心は頂けたと思つている人が多い。楽しい浄土を前に置いて欣求するのが信心ではない、如来の大悲に助けられて往生を遂ぐると大悲が頂けたのが信心である。不思議が信じられたが信心である。とかく信心の前に、厭離欣求の思想がなければならぬ様に考へるものが多い。聖人は厭離眞実を先にするは聖道門自力、欣求真実を先にするのは浄土門中の自力であると断じて、利他眞実の信心はただ虚仮不實の我身あるのみ、これに対して慈悲捨哀の本願力の眞実が一つあるのみである。この御慈悲をこうむりて、初めて欣求心、厭離心が自然に湧いて来るのである。それ故に大信心を欣浄厭穢の妙術と名づけるのである。すでに信心の上において罪悪が自覚されてなきゆえ、世路において如何に眞面目にしてもものたらぬというは、つまり人間として出来得ることまでを実行せんと試みて、しかもその実行難

に泣くのである。その志は立派であり、その情は哀れむべしといえども、要するに不可能の事をなさんとしているのである。煩惱具足を忘れて居り、必墮無間を自覚して居らぬのである。落ちぬ者に救いの繩は不用である飢えぬ者が満腹したというのは、物食わずして食うた氣になつてゐるのである。信仰は安宅なりと叫べど、不安ならざる人生に、唯言葉だけの安宅である。

煩惱具足、火宅無常の世界なれば、唯一の救済として仏陀が安宅である。かくてこそその唯一の繩、唯一の安宅が実に杖とも力とも信ずる外はない。たとひ法然聖人にすかさずまいらせて、地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候である。何んとなれば、もともと必墮無間であるからである。かくお話しした時、かの眞面目な人が、大悲の眞の救いをいただいたのであつた。

つまり、従来信仰を得たと思つていたが、不徹底だったために、眞の人生に活動が出来なかつたのである。然し、その不徹底に気づかず、徒らに唯俗諦がまもれぬ、能力が足らぬと歎いていたのであつた。これは昔から信者の上に多くある間違ひである。つまり、眞諦と俗諦と、その範圍を区分して、未來問題を眞諦門とし、恰も罪惡を寛容された如く心得、現実問題を俗諦門として、嚴格に信者の名の下に無限の実行を強いる弊がある。如何に未來と現在を

區別しても、眞面目に考へれば、現在の行為が即ち未來の原因であることは、誰も自覚せねばならぬ。それ故、その様な両刀使の様な便宜な信仰に安住することは出来ぬ。なお一層皮肉に言えば、如何なる罪惡でも煩惱でも眞諦門の入口を無事に通過せしめて、俗諦門の出口において、嚴格に一々誰かして、通過せしめぬ様なもので、苦しまざらんとしても苦しまずには居られぬのである。信者たるものまた憐れむべきものである。

それは昔の信者ばかりではない。現代の青年にして既に信仰を得たりと自認し、少くとも根底ある思想に到達せりと考へつつ、それが人生行路の上に活躍せぬために泣きつつあるものが少くない。甚だしきに至りては、遂に外界と衝突し、一世を敵視し、徒らに怨みを抑え、声を吞みて哭するものもあろう。これらの人は須らく回顧一番、先ず其信仰自身を考へねばならぬ。絶対の信仰は必ず人生全面に向つて光を与えねばならぬ。あらゆる境遇、あらゆる職業、あらゆる機類に向つてその慈悲の光が透徹するのである。

如来は我等のすべてを御存知なされるのである。我等の罪惡を底の底まで見透しなされるのである。我等の苦惱を悲憫したまうのである。而して我等がために悲涙し、我等がために思惟し、我等がために修行したまうのである。我等の不眞実、不清浄をみそなわして見捨てたまわぬ、大悲大慈

の親心こそ我等がための生命、我等がための力、我等がための光明にてまします。これ実に無碍光如来の光明なり、南無阿彌陀仏の名義なり、阿彌陀如来の御心なり。我等はこの御心にかない、この光明に攝取せられ、この御名を聞きて、ここに初めて聞其名号信心歡喜の人にしていただくのみ。これひとえに御親のやるせなき御誓の御力である。

若不生者のちかいゆえ

信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは

往生かならずさだまりぬ

南無阿彌陀仏々々々々々々

有名な眞宗の碩学、香樹院講師は常に、自ら地獄をおそれて人々にその事ばかりを説いていられた。当時幕府の儒官、林大学という人が、親しく師を寺に訪れ

「地獄はまことに在るものですか」

と。その時、師は理屈も経説も話されず唯

「罪なき人にはこの世の獄屋さえもありません。罪の軽重によつては無量無辺の地獄があります」

と答えられたので、大学は非常に感ずるところがあつて深く師に帰依された。

歎異抄第三章

池山榮吉

一体道德の鏡にうつる善悪とはどんなものでしょう？これに詳しい解答を与えるには、倫理一般の講義をせねばなりません。それは時間が許されないうえに、その道の人を待ってはじめて出来ることです。そこで、以下ごく簡短に私の考えているところを述べましょう。それは大体においてリップスの学説によるものと御承知を願います。

悪人を以って自認している私でも、今のところ法律に触れる罪も犯していませんし、道德の上でも世間からきわだつて批評されていません。日常の職務も人並にはしている。沈香もたかないかわりに、別に人に迷惑をかけるでもなく、その日／＼を送っています。もし道德が、単に行為の表に現われる過程だけを評価するのであれば、私としてそう悪いという程でもなくてすむかも知れません。然し道德が重要視するところは、行為の外的過程、即ち作用ではなくて理由であり動機であります。更に進んでは動機と動機との関係であります。しかもその際ただ實際働いた動

機ばかりでなく、宜しく働くべくして働かなかつた、もしくは働いていてもその氣勢が弱かつたため、他のものに打勝てなかつた動機までも計算に入れるのであります。而してその全体の釣合が、あるべき筈であるようにある、というのは即ち、諸の動機が秩序整然として、上位にあるべきものは上位に、下位にあるべきものは下位に、上下左右列を正して、一絲乱れない統一調和の状態にあるのが、道德的価値の完全なのであります、その間すこしでも狂いがあれば、それだけ価値の少ないものになるのです。以上によってみますと、道德的価値はつまり人格の価値で、動機の釣合によって定まるのであります。さてこうなると、私のような者は、なが／＼善人の仲間入りが出来ないどころでなく、根こそぎ自己をみつめる例の癖がたつて悪人も悪人、極悪最下のどん底に沈淪しなければならぬのです。

ここに或男があるとす。その男には一万円の借金があ

る。その金を貸してくれた人は或事情のため俄かに窮地に陥つた。借りた男は、今その金を返さなければ恩義に背く

し、男の一分もたたない。返したいのは山々だが、事業が

思わしくないので、返すべき金がない。今日も金の工面に

出かけたが、心当りにしていた此処でも彼処でも体よく断

られて、思案投首で、重い足を引摺りながら我が家に帰る

途中、ぱったり物につまづいて、よく見ると一つの鞆があ

つた。取り揚げようと思つたが、今こんなにながごとく困

っている矢先、他人の落し物を拾つて、この上面倒を背負

いこむでもあるまいと、二歩三歩行過ぎたが、それもなん

だか気になるので、思い返して鞆を取つて中をのぞいて驚

いた。札束だ！それで鞆に一杯になつていた。一滴の冷水

が背筋をつたうかに感じた。急に人目を憚る気がした。う

かがうように四辺を見廻した。誰か彼かの夕暮である。通

行の人もない。無論鞆を拾つたところを見ていた者はない

……その晩彼は自分の部屋に錠をおろして、一人で札束を

勘定してみた。総てで数万の額に上つた。手の切れるよう

な札だったの言うまでもない。翌日彼は鞆を持って、今

度は羽織の下に忍ばせたりしないで、遺失物として警察に

届け出た。そしてその翌日の新聞には、正直者という見出

しの下に、巨額の金の拾主として彼の名前がのつていた。

——が、彼は果して言葉通りに素直に正直者だつたであら

うか？

いつわらざる彼の日記にはこう書いてある。『昨夕ほど

弱つたことは覚えがない。今さら思うと、ああしたのはよ

かつたけれど、それまでにどんなに躊躇したことか。世間

の人は正直者だとほめてくれるが、自分にはちつとも自分

が手に入ったのは、これで急場を凌げよとの天の賜だとは思

わなかつたか。そのすぐあとで、待てよ、天の賜だなんて、

うっかり手をつけたなら、一時は恩人への義理もたぢ

懐工合もよくなるには違いないが、後からばれたら百年目

だ、遺失物隠匿の罪にとわれて、赤衣着物をきなければな

らなければ、そのまま戻ってくるのが上分別だ。万一落し主が解ら

ぬの札金にありつけるといふものだ。尤もそればかりの金で

は焼石に水で、折角授かつた福を捨てるようで、惜しくて

たまらない気はするが、天の与える幸をとらないからとい

つて、まさか禍もあるまいし、一旦自分の名前が正直者と

して通れば世間の信用も増してくる。それからまたこう思

た物をそのままねこばをきめこむなんて、人情のあるものから云つてもやはりそうだ。健全な権利思想の持主には、そんな無茶な真似は出来るもんじやない。まして道徳観念、宗教観念の上からみればなおさらだ。君子とも信者ともあろう者には、そんなけちな考えは念頭にすら浮ぶまい。

それからまたこうも思った。単なる利害の打算からみても悪銭身につかずの譬もある、因果はめぐる小車の善悪の業報が恐ろしい。人に知られて困るようなことをしては、第一あとの気持が悪い。俯仰天地に愧じずという快活さは法令の定めに従う公明と、不当の利得をいさぎよしとしな

い清廉さの反応に外ならない。またこうも思った。何ほともあれ届け出ないでは気がすまない、それは自分の良心の要求だ、カントに云わすと直言的命法だ……結果届け出るのは出たが一体どの動機によるのか——自分には解らない。この例でも解りますが、行為はさまざまの動機または心術からおこります。その行為の道徳的価値は、行為だけでは決定されなくて、その行為の出た心術如何にかかっています。今の男にしても、届出の行為が最後に思ったとある通り、良心の要求から出たのであればいかに正直者という名にふさわしいが、ひよっと初めに考えた理由によるとすると、正直者というより、いっそ猪い男と云った方があ

に教育家をもって任じてもおらず、また教育をするということが、実はあまり好きでない点から推してみても、学校のため、学生のため、ひいては国家社会のために、応分の微力をしようという本務の意識からやっている、きつぱり言い切れませんが、衣食のため、地位のため、一口に云えば名利のためが主な動機となっているのは事実です。そう、せめて職務に最善を尽して遺憾がないかと云うと、これも一言もない、閉口頓首して懈怠の身を愧じています。

道徳はあるべきようにあることを要求します。これは何たる恐ろしい言葉でしょう！「身とこしえに懈怠にして精進なること難し」とはそれを満たそうとして満たし得ない悲歎の叫びではないでしょうか。そうです、その懈怠こそ道徳上悪の源、否、実は悪そのものなのであります。

悪とは、あるべき善であるようにないことです。思うべき善であるように思わないことです。思うのが悪いのではない、思わないのが悪いのです。勝手にかまけるのは、あるべき善であるようへの精進が足らないからです。この意味において悪は否定であります。悪人とは勝手にかまける人です。思うべき善であるように思うことを怠る人です。上位にあるべき動機を、下位にあるべき動機にまかすんです。働くべき善であるところの動機のない、もしくは弱い

たっています。

一つの行為の背後には種々な動機が控えています。それはしばしば他を欺き、自分を欺くのを利用されます。私共の欲求と良心とが、手を引合つて同じ道を行っている間は無事ですが、良心の命令と欲求とが反発するとさあ事です。異つた方向を取ろうとする両頭の蛇と同様に動きがとれなくなり、その結果あらわれた行為の背景は、体のいい動機で飾られます。いかがわしい、その実もつとも有力な動機はそのうしろに隠されてしまします。そうした自己の奥底を正視するにたえないで、中途で眼を塞いでしまふ善人などは、こうした方法で自分を欺く場合が多いことと思われま

す。私が平生積極的につとめておりますことの中で、比較的眞面目にやっているなと思われるのは、まあ教師としての職務でしょう。それとてもです。内裏から見た状態は、とても御披露できるようなものではありません。親鸞聖人は「是非しらず、邪正もわかぬこの身なり」と慚愧されました。けれども、名利に人師をこのむなり」と慚愧されました。それとこれとは事も変つているし、あなたが聖人を引合に出す次第でもありませんが、唯お言葉借りて申しますと、ほんにそうです。名利に人師をこのむなりです。自分が現

人です。

悪がこうしたものだとすると、瞬時の油断もなりません別に悪い事をしないからいいと、消極的にのんきに構えこむことは許されません。飽くまでもあるべき善であるように積極的に努めなくてはならないからです。そうでないと否でも応でも悪人たらざるを得ないからです。ここまで考えますと、ひとりで長太息せずいられぬのは「悪性さらにやめがたし」の歎であります。懈怠が生来の病である私には、何時になつても悪人の肩書がとれません。

ひるがえつて今一度、善の方を眺めましよう。道徳的に善であると云えるには、或行為が「べきはず」の型にはまっているというだけでは足りません。その型に相当する「べきはず」の人格から発したものでなければなりません。……完全な情懐の人格とは内に一切を包摂して完全に充実し、剛健で、潑刺な、完全に自らと一致して内的に自由な人格であるということです。これこそ道徳上理想の人格と云えましよう。

なんと高い山ではありませんか。前に悪の深さにおののいた私は、今度は善の高さにおびえて、手も足も出ません尤もリップスも云っています、こうした完全な道徳的情懐は何人にも授けられない。もしそうした人があれば、もはや

一人間ではなくて人間自体であると云っています。

以上は道徳、人間の人間たることを目標としています。仏教的道徳は、成仏を以て最後の目標とするだけ、世間普通の道徳より更にむつかしいものに違いありません。その世間普通の理想的人格さえも遂げ得るものは一人もないとなると、その理想は絶対不可能ということになります。成仏についても同じことが云えます。さあこうなると理想が単に理想に止まっています。さあこうなると理想がその理想が生きて人格を具して私共を迎えてくれて、ここにはじめて理想が実現出来るのです。

不可能とはしりながらも、いかにもいかにもそうありたい、こうした要請をみたすのが絶対他力の信仰であります。完全な人格の達成は、如来の廻向に待つほかはないのです。

人生の行路をたどる途中、己が身の罪惡に行手をふさがれて、進退きわまつた旅人に、絶対他力の呼声がきこえるこれが善導大師の有名な二河白道のお話です。

(信を行く旅人より)

三河 お園同行

三河国のお園と云う名高い篤信者は大谷派の碩学一蓮院師のお育てをうけた同行である。

そのお園が一蓮院師に初めて逢われた時、「和上、私は永年信心が頂かれませんでしたので誠に苦勞してありますが、どうしたら信心が頂けましょうか」とお尋ね申し上げたら

「あなたはそんなに御信心が頂かれんか。よしよし如来様は、お園お前一人は信心なしでそのまま連れて行くぞと仰るぞ」

これを聞いて同行涙にくれながら

「お園一人は信心いらすにこのまま連れて行って下さるとは、何とお慈悲の親様でしょう」

高声にお念仏称えながら

「和上、御信心とはこのやるせない親心を聞かせて頂いて、安心信心に用のない事になったのが信心でございまして、たか」と喜んだということである。

真実の道

—— 嫁し行く人々に贈る ——

山本晋道

近頃、身辺のお嬢さん達が次々と良縁あつて嫁して行かれる。そして、御本人やその御両親達から何か門出の言葉をと求められる。そこで、かつて光代さんがお嫁に行かれるときに饒別に贈った一文をここにかかげることにしました。

縁につながるということはなつかしい。ことに幾年か法の御縁に結ばれた方々は懐かしい。その美しい無邪気なお嬢さん達が、これからいよいよ人生修業の第一歩を踏み出されるのが結婚である。苦勞はされても、それでいじけたりひねくれたりせずに、みがきのかかった強い魂が出来るなら、あらしもまた結構である。

事実、人生行路は多事多難である。当って碎けて、自分を育てて行く外はない。そのために何より大切なことは法を聞くことである。心からお念仏申す人になることである。その外には決して円かな幸せはない。

幸せな時にも、不幸な時にも、仏法に耳傾けて、仏様の

御慈悲を頂いて生きて下さいよ、と言うより外に、さしあげる言葉は私には知らない。

光代さんに初めて会ったのはもう十年も前になるかと思う。女学校を出られたばかりの娘盛りであった。叔母さんにつれられて立山のNさんの宅で開かれた御法座であった。それから今日まで、御一家のすべての方々と深い御縁が続いている。

光代さんは幼い時にお父様を失われて、兄さんとたった二人の兄妹である。この兄妹は頼り少ない身に、法の兄妹のたのもしさを知り始めて、月々欠かさずお聴聞を続けて来られた。ことに毎月の長崎聞思会の時には何時もお給仕役で、何くれとなく心をこめて身辺のお世話をして頂きました。諫早の寮にもお座毎に走せつけて、家族同様に働いて頂きました。私にとっては、娘の如く、妹の如く、光代さんもまた、兄の如く父の如く慕って下さった。そして娘

時代の色々の思いを素直に打ち明けて相談に來られ、私も遠慮なく、時に叱り、時に慰め、励まして今日に至りました。腹一杯思いを訴えに來る手紙の終りには、光代のお父様へと何時もありました。

私も六つで父を亡くしました。お父様と呼ぶ人を持たずに育つ寂しさは、父なき子のみが知ります。そしてまた、お父様と甘える人を持ち得た嬉しさは、知る人ぞ知る世界です。美しく、健やかに、幸せに伸びて行けよと私は念じてきました。その光代さんの娘時代にも次から次と縁談はありましたが、因縁が熟さずに三年五年と過ぎて行きませんでした。この世のことは何事も因縁ごとであるとは云いながら、はらはらしながら私は見守ってきました。そして何かもお念仏一つにすべくつて、ひねくれもせずひたすらに一道に生き抜いて來ました。その間、小さい心の動きまで打ち明けられて來た私は、娘十八からの修行を一緒にさせていたたく心地でした。

こうして光代さんにも、遂に良縁にめぐまれる日が訪れました。人生のことは何事もあせらず時を待つことです。真心こめて、力一杯生きた上は、何事もなるようにしかありません。それを素直に受け取って、ひたすらに法の光に育まれて生きて行くことです。どんな形で生きようとも、お念仏一つあれば生き甲斐ある人生が展けますとは、何時

光代さん。

行つてらっしゃい。

貴女も嬉しいだろうが、今日の日を迎えて私も嬉しい。幸せに暮らして下さい。

親には孝

夫には貞

弟妹には慈

ふむべき道ははっきりしています。真心こめて力一杯やる一つです。貴女はきつとやりとげてくれる、私はそれを確信している。何故ならば、貴女は弱くてもお念仏は強いから。人生は複雑でも仏様はきつと生き抜かせて下さるから。聞くところ道は必ず恵まれてありますから、そして貴女はこれのわかる人、それ一つが貴女の強みです。

長い間、真心こめて、影の形に添う如く、よろこそお給仕して下さいました。

心をこめて、愛でいつくしみし法の花一輪、やるには惜しく、やらぬには尚惜しい今日の別れ、無量の感慨を胸に抱いて、お念仏とともに送り申し上げます。合掌

その後

式は思出の深い聞思会場で、簡素に厳肅に挙げられました。支度の上にも、挙式の方法にも、時局にふさわしく、

も光代さんを励ましてきた私の言葉でした。

Tさんとの御縁談がまとまって、いよいよ挙式の日の近付いた頃、立山の聞思寮を訪れて、光代さんは「先生、お約束の御褒美を下さい」とねだるのでした。長年お給仕していたいただいた御札に、お嫁入りの時にはお祝の丸帯を一本贈りますよ、とは、かねての冗談交りのお約束でした。光代さんから請われるままに、その朝、巻紙に認めて送ったのは次の一文でした。

嫁しゆく光代さんに 昭和十五年秋十一月

お目出度う

名残り惜しくもまた嬉しい日が來ました。宿世の因縁厚うしてめぐりあわせていただいた私共でした。心をこめて、もろともに掌合わせてきたこの八ヶ年でした。すくすくと慈光の中に、うるわしく伸びて行かれる貴女の前途にどんな人生行路が展げてくることかと、何時も心にかかつて見守つて居りました。

平和な、純情な貴女の娘時代にも、試練は幾度かやつて來ましたね。けれども貴女は、能くそれに堪えて、身も心も清らかに今日まで歩き抜いてくれました。今貴女を送り出すにあたって、私は何よりも、このこと一つを貴女のために喜びとし、誇りとも感じます。

法の世界に住む者のたしなみはあるべしと、私共の一致した考えでありました。御主人のTさんは仲人のNさんとは遠縁に当る温純な真面目な青年でした。お二人は挙式の翌日、直ちに上落して、京の私を訪れて下さいました。人生の晴れの門出に、京の御本山に虔しく願いて、踏み出して行くこの二人を、私はたのもしく眺めました。その後三年たちました。少壮有為なTさんは抜擢されて、長崎港外の某水産工場の工場長として、今、日夜多忙な職務に精励しておられます。その蔭に、つつましくいそいそとかしなく光代さんの幸せな姿を眺めて、私もほっとしています。

昨年夏、貴女にさしあげた丸帯の写しを下さいと願いましたら、それに添えて、次のようなお返事を頂きました。

写しに添えて

唯今この写しを書き終えて新たな感慨が湧いて参ります。何も申し上げる事もございません。ただお念仏さまが口をついて出て下さいますことを不思議と申し上げるより外ございません。蟬しぐれのかしましく降りしきるこの土井首の佗び住いに、光代はまだまいでしよう云うのを、主人が何もないと落ちつかぬからとて、光代の里からお借りして來て、御安置いたしました仏さま―お氣の毒なことでございます。お花をかえ、お仏飯をお供えするのただ主

人が見ているからのこと、これでよいのか知らん、何だか落ちつかぬがと仏様にお聞きしましたら、それでよいとおっしゃいましたので、お恥ずかしいまま安心して居ります。私が出て叱らねばならぬ時が来れば、光代はいやでも出かけて叱るからねと、あちらからもこちらからも……光代にはそのお声がよく聞えるような気がします。だからお父様には当分書くまいと思っていましたのに、つい書いてしまいました。

立山の伯母様からお聞き及びのことと存じますが、光代が赤ちゃんを産むらしゆうございます。こわいやら、はずかしいやら、うれしいやら、何と申し上げてよいか分りません。来月頃になったら、月もはっきりするでしょうとお医者様もおっしゃいました。体は別に異常ございませんで、とても元気です。欲を言えば限りがございませんが、どうぞお慈悲に不感性でない子であつてくれよと念ずるばかりです。子に願うよりも、光代が母であることが出来ましようか。母になることは安いが、母であることはむづかしいとかつてお聞かせいただいたのを思い出します。光代だから母であり得る、いや、光代だから、どうして母であり得ようと、消えたり浮かんたりしています。

ただお念仏させていただきます。
お父様、お体お大切に遊ばして下さいませ。主人も旅は

かりしていますが、元気で居ります。

合掌 光代

×
私はしみじみとこの手紙を読み返した。げに母になることは安い。嫁して一二年すれば知らぬ間に母になる。さりながら、母であることはかたい。体を育て、着物を着せ、学校にやっただけで、母と名告る資格があるうか。まことの母であるならば、その子の体を愛する以上に、その子の魂の行方を案せねばならない。人生の目的は何か、人は何処から来て、何処へ去るか、泣いてくらしでもいじけるな笑って暮らしてもふざけるな。人生には是非ともたどりつかねばならぬ生死の彼方の岸があるぞと教えてこそ母であるう。自ら聞いて、先ず救われるより外にまことの母になる道はあるまい。

嫁してゆく人よ。

先ず母になれ、そしてまことの母であれ。

(昭和十六年四月二十日)



御一代記聞書抄 (続・二〇)

信を獲たらば同行に荒く物も申すまじきなり、心やわらぐべきなり、触光柔軟の願あり、また信なければ我が我にたりて詞も荒く、諍も必ず出来るものなり、浅まし／＼、よく／＼心得べし (第二九一条)

人間の本能的な自然感情の奥には「我もと」という意識が宿っています。そしてその自我の意識を当然の事として肯定しているのが人間であります。さてその「我」とはそもそも何であるかという事は、尋ねられてもおらず確かめられてもいないのです。ただ漠然と、俺が俺がと思っているのです。その「我」と意識されているものが、実は極めて閉鎖的な自我の幻であつて、真実の自己ではない事を仏陀の教は私どもに告げ知らせ下さっています。その幻の我に執われている深層の意識を我執といわれるのですが、その我執が人間の本能には先天的に宿っています。人間意識の根源的な迷いはこの我執にあります。そしてその幻の我

井上善右工門

に好ましきものをよろこび、反するものに瞋恚を生じるのです。

我々が荒々しい言葉を発するとき省みるがよろしい、そこには必ず自我に好ましからぬ事態が生じているものです。たとえ偽りの言葉でも自分が誉められると嬉しい、本当と解つても自分が批判されると腹立たしい。この事でも明らかです。その自分々々と思つていられるものが勝手に幻である事が知らされます。そうした空しい我執に駆り立てられて一生を過ごす事は情けない事といわねばなりません。

二
仏教は真実の教です。迷を破るものは真実です。念仏の信とは仏の大いなる真実を頂戴することです。仏心が慈悲となつて、この迷妄の我執に浸透して下さいませ。

「信を獲たらば同行に荒く物を申すまじきなり、心やわらぐべきなり」これは念仏者に現れる自然の姿であります。何故ならば意識の深層の我執が大悲の徹到によつて、我れ

知らず破られるからであります。仏の大慈悲に心開かれるとき、必ずやわらさが胸におとずれます。それは奇しき信の消息であつて理屈ではありません。瞋恚の煩惱が皆無になるのではありませんけれども、不思議に心に余裕が生じて和ぎを覚えるのです。有難い事です。なぜそうなるのかを示して「触光柔軟の願あり」とまうされています。触光柔軟というのは、光に触れて身心が柔軟になることです。それはとりもなおさず、我執という迷の殻に包まれて硬直していた心が、真実の光に遇うて解放されるからに外なりません。光とは智慧を表わす言葉です。

大経にはこの触光柔軟の益を四十八願の第三十三の願に誓うておられます。そして親鸞聖人はこの第三十三願を真仏弟子の積（信巻末）に引用しておられるのです。さらにまたた仏心の光が心光常護、心多歡喜の益となつて顕現して下さる事を、聖人は信心の「現生十種の益」の中に挙げておられます。念佛者の心やわらく必然のことわりに気づかしめられるのであります。

聞書第九十一条には「信あらば仏の慈悲をうけとり申す上は、我ればかりと思うことはあるまじく候。触光柔軟の願候ふ時は心もやわらくべきことなり」とありますが、今と全く同じく信徳の所以が語られております。

三

凡骨日誌抄（十）

影淡

西元宗助

さる四月四日（土）、故・菌田香勲先生の十三回忌法要記念の法話会に招かれて、久々に和歌山市の妙慶寺さんにお詣りする。駅に迎えてくださったのは、はからずも先生の御末男の垣さん（大阪市立大学助教授・宗教学）で、いたく恐縮する。

菌田先生とのご縁は、京都の知四明寮がその初端である。それにつけても、あらためて想うこと、それは羽溪了諦博士の主宰された下鴨の知四明寮のご恩である。私どもは、学生時代を、この寮で過したお蔭で、仏教にふれえたのである。菌田香勲師も、知を辱うしたのは全くこの寮のお蔭であつた。

香勲先生のお人柄は飄（ひょう）々として、爽やかな春風の如く、また浄らかな空気の如く、おありだった。それこそ、どんな偉い方にたいしても、どんな貧しい方にたいしても、お態度は決してかわることがなかった。

この人生に争いを好み、いさかいを欲する人がありましようか。やわらぎを求め、平和を願うのは万人の切実に希求するところです。しかもこの世に常にその願いを裏切る風波が絶えません。家庭においても、社会においても、世界においても、根本の原因に変わりはないと思ひます。

意識の底深く潜む我執を処理することなしに、真に明るいやわらぎは訪れません。表面の組織や制度を改変してみるのですが、別のところから我執の禍いが吹き出ます。歴史が繰返すといわれるのも、ここに根本の原因があるといつてよいでしょう。その根本原因を照破するのは、ただ信光による外はありません。そのころをいま「また信なれば我になりて詞も荒く諍も必ず出来るものなり」と言われております。さすればこの信の道は、人類の歴史の命運をも荷負うものであります。決して個人の問題のみにかかわるのでありません。「往生は一人々々のしのぎなり」といわれたその自己の根本問題が、同時に人類の一人としての使命を果す所以となるのであります。

人間と生れながら此の大事に思い至らず、自損々他の苦惱の中に自ら転々とするということは、かえすがえすも遺憾の極まりであります。しかもそれとは気づかず、さ迷い続けている事を誡めて「浅間し／＼よく／＼心得べし」と悲懐を述べておられます。

私事にわたるが、わたしが昭和二十四年秋、シベリアから帰国してみると、当時、和歌山に住んでいた妹夫婦も、その義弟の兄弟も、はからずも妙慶寺さんに入入りして、先生ご夫妻に深く信服しているのに驚いた、随喜した。これは後日物語になるが、この因縁で妹夫婦の娘は、ついに菌田家の次男君に嫁することにもなつた。

先生の著書には、ご専門のドイツ文学関係の著書以外に『無量寿経諸異本の研究』『東洋の叙智』『真宗へのすすめ』など数冊がある。これらの中から、その思想と信仰の一端を伺つてみよう。

「真の聞法は、得道と共に始めて可能となるとも考えられる。この意味においては、往生は聞法の終止ではなくて、かえつて実はその開始である」（無・一九五頁）。あるいは「一切の人間善そのものが、如来の鏡に映せば、悪の変態にすぎない。ただに善をなし得ないばかりではない。いかに善をなすとも、しかも遂に悪を離れないというこ

とこそ、人間性そのものの本質に根ざすところの、絶対的な限界なのだ」と（無・二五二頁）。また「神妙は夢と超現実のなかにはない。かえって深き現実のうちにこそある」と。

ともあれ、先生の御長男で現住職の香融師（関西大学教授・仏教史）はじめ、御一族・御門徒の方々でいっぱいのご本堂で、はれがましくも一席の法話をさせていただく。なお、客室に戻って、母堂はじめ、令息や門徒総代の方々、と歓談してはじめて知ったこと、それはご兄弟の方々、みんな、この「慈光」誌を読んでおられるらしいこと、そしてそれは母堂の深い念願によるものであられることであつた。

帰途、車中で家内が、そつと囁くようにいう。みんな仏さまのような方ばかりと。それで私、肯きながら、蘭田さんの家は、代々、お念仏の血が流れているんで、ちよつと違うんだよ。だいたい、香敷先生のお父さんの宗恵師は、西本願寺のアメリカ開教の父・初代の監督であり、晩年は龍谷大学の学長。それにベルリン留学時代には近角常観師や池山栄吉先生らと一緒だった方。またあのおばあちゃん（母堂）のお父さんは、なんと永源寺派の臨濟宗管長を

きは、まことに感無量でありました。殊にこの三月、令息真観さま（慈光四月号所載）も逝去されたことを承りましただけに。

外陣の欄間には、常観師ご夫妻並びに令弟の常音師ご夫妻の写真が飾ってありました。そして丸岡さんに案内されて、ご本堂の傍なる、常観師の御尊父・慈光院釈常随法師のお墓に参り、このお墓には常観師のご遺言により、師の御遺骨も亦ここに合葬されてあることを承り、あらためて墓前に瞑黙し、念仏申したことでございます。しかしこの日は、雨の降る中であつたことと、気車の都合もあつて、他日を期し、あわただしく辞去せざるを得なかつたのは、まことに心残ることであります。

例によって、榎本榮一さんの詩の中から、わが心にひびくものを一つ、いただく

影 淡く

軒瓦少しくずれ
わが家も古くなり
わが影も淡くなり
一日いちにちのひかり
なにか尊くなり

なされた青津実師で、しかも師は晩年、浄土真宗に帰依した方なから、と申したことであります。

四月十九日（日）、滋賀県北の高月町、双林寺での法話会（歎異抄）のあと、川那辺誠師運転のクルマに乗せていただいて、春雨降る中を約二十分、かねて宿願の、湖北町の西源寺にお詣りする。御本堂の屋根も高くない、ささやかなお寺であつた。

この西源寺こそ、近角常観師のお育ちになつたお寺。しかし久しく無住となつていて、現在は村の有志が、丸岡静夫氏などを中心に、交代で仏さまのお給仕をしていられるという。この日は、双林寺さんの会に参加してくださった丸岡さんや、丸岡さんと同じように、近角先生のご教化に浴してこられたお婆さん！この婆さまは、それこそ仏さまのような顔をした方で、私が高月に参ると必ずお詣りになつて、一番前のほうにお座りになる！このお婆さんたちのご接待で、平素は閉めてあるご本堂の扉をあけていただいたのである。

わが師・福島政雄先生や池山栄吉先生の、師匠であり友人であられた近角常観師、そのお寺にまいらせていただいて深重のありがたき因縁を想い、御仏前に合掌礼拝したと

追記 以上を認めて郵送しようとしていますところに、懇篤な木村無相さまからのおたよりとどく。涙ぐむほどありがたい。それにつけても、名利の念の底知れぬほどに深いわが身を思うことでございます。合掌。

ブルースト（一九二二没）

失われた時を求めて

一回かぎりの人生

帰り道のない旅だ

毎日を丁寧に生きよう

念仏詩抄

木村無相

かかるわたしのための

香師おおせに

香師||香樹院徳龍師

〃闇(やみ)の夜に

目をあいて見ても

ナニも見えはせぬ

こちらの目からは

明(あか)りは出ぬ―

かかるわたしのための

五劫の御思惟―

名号の御成就―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

死ぬる

香師おおせに

〃死ぬまいと

思っているうちに

死ぬる―

死ぬるも

死ぬるも

今死ぬる

この身―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

いつもいつも今が

香師おおせに

〃後生知らずに

今まで暮らして来た

ことを思つてみれば

まことに千丈の谷の上で

目がさめた心地じゃ―

いつもいつも今が

千丈の谷の上

今 墮つる身

今 死ぬる身

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

うき世の不足を

香師おおせに

〃この世の喜びは

人々同じからず

浄土を願う身には

だれもかれも

同じ喜びあり

この喜びを知るならば

うき世の不足は言うて

おられぬなり―

うき世の不足を

思つにつけても

うき世の不足を

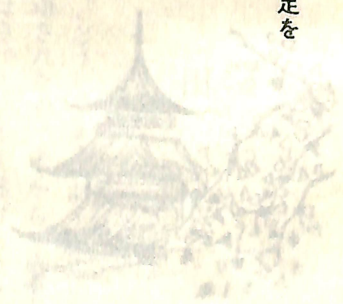
云うにつけても

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ



わが分別では

香師おおせに

“助かるイワレは

まいるて聴聞して

ウタガイはらすこと

これはわが分別では

はれぬなり”

聴聞 聴聞 聴聞

だが聴聞しても

わが分別では

はれぬなり

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

はなはだマレなり

香師おおせに

“法を聞きて法に入り
法に入りて法を得る
法に入る人は多けれども

法を聞き得る人は
はなはだマレなり”

聖人御和讃に

“善知識にあうことも

教うることもまたかたし

よく聞くこともかたければ

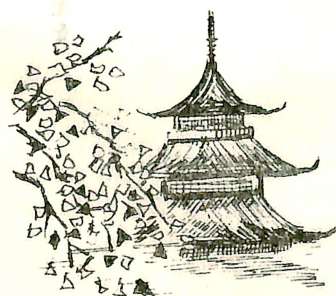
信ずることもなおかたし”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ



源信僧都の讃仰

母君の慈誠

十三才で叡山に登られた源信僧都が若冠十五の時、村上天皇の勅命によって御殿でお経の講義をせられると、天皇の御感が深く、御褒美として布帛を賜ったのであります。僧都はその喜びを故郷の母君に使をもって告げられますと「わが子が誉められることは嬉しいけれど、そのために名利に墮して、世を渡すべき僧が世渡り僧になるのが心配でならない」ときびしく誡められました。

後に僧都は閑静な横川に隠棲され、自室には「名利」の二字を掲げて常に拝まれながら、一筋に修学修行を重ねられたのであります。この母にしてこの子ありであります。

空也上人との会见

僧都は或時、念仏一つを勧めて人々を導いていられた空也上人をたずねられると、年だけ徳たかく直人とも思われぬ、尊い御姿に接し、「娑婆をいと浄土を願う心が深いと往生出来るではありませんか」とお尋ねせられた。上人

花田正夫

は「自分は無智の者で、どうしてそのようなことを知りましょうか、然し智者の申されたのですから、穢土をいと浄土を願う志が深い者はきつと往生を遂げられます」と仰言ると、涙をながし掌を合せてよろこばれました。

この空也上人のお答は、親鸞聖人が、はるばる関東から京都の聖人をたずねた同行方に「ただ念仏して弥陀にたすけられよとのよき人の仰せを信するだけで、自分としては念仏は浄土に生れるたねやら地獄におちるたねやら知りません。但しこのことは弥陀の本願であり釈迦の仰せであるからむなしのことではありません」と再会を期し難い会见でお答えせられたのと符合を一つにされるものであります。僧都の感銘も深かったことでありましょう。

二十五昧式

―二十五の迷界を出離する行法―

夫れおもんみれば三界はみな苦なり、五蘊は無常なり。苦と無常と誰かいとわざらんや。然るにわれら無始よりこ

のかた道心をおこさずまいまだ悪趣をまぬがれず。悲しい哉、いずれの時にかまさに解脱分の善根を植えん。

そもく観経を案ずるに云く、衆生あり五逆十悪を造りて諸々の不善を具す。かくの如きの悪人悪業をもってまさに悪道におち多劫を経歴して苦を受くる窮りなかるべし。

かくの如きの悪人、命終の時、善知識の種々に安慰してために妙法を説き、教えて仏を念せしむるに遇えり。かの人苦にせめられて仏を念するにいとまあらず。善友告げて曰く、汝もし念することあたわずんばまさに無量寿仏と称すべし。かくの如く心をいたして声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に念のうちに八十億劫の生死の罪をのぞき命終の後に、金蓮華のなほし日輪の如くその人の前に住するを見て一念の頃のごとくに即ち極楽世界に往生することを得たり。この文われらが来世の證誠とするに足れり。

僧都は極悪最下の凡夫の称名一つにたすけられる経文を拝されて、そこに御自身の救いを見出していられるのであります。極重悪人他の方便さらに無し、唯弥陀の名号を称えて極楽に生るべしと、常に仰言ったのもここにあるのであります。

往生要集序

夫れ往生極楽の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰

りつるに、同じころにてありけりとのみ声がひびいて下さる。また身に持つ業苦に行き悩むにつけては、さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしと聖人が同座して下さるのであります。こうしたことを縁として、僧都のこのお歌が身にしむのであります。

鹿を追いかえさる

横川の御隠棲の頃、種々な動物がお住居の近くに來て遊んでいた。或時僧都が、群れ近づくと鹿どもを杖を持たれて追い払い、山奥に帰らしめられました。これを見た人達が、僧都はいつもお優しいので安心して鹿も集まるのにどうされたことかと不審に思っていた。

僧都はその人達をかえりみられて、鹿は愚かであるから自分が優しくしてやると、人間は誰もそうしてくれらると思ひ、獵師などにも近づいてひどい目にあうから、人間は怖いものだとすることを知らせようとて、杖で叩いて追いやつたのだと言われたので、はじめてその深い思召しに心うたれた由であります。

誹謗讚歎共に浄土の結縁

僧都が往生要集を著わされた頃、たまたま大宋国から渡來していた周文徳がこの著書を読み、随喜して是非とも宋に持ち帰り、皇帝にも献上申したいとお願ひした。僧都はこころよくこれを許され、その添状に

か帰せざる者あらん。但し顕密の教法はその文一にあらざりし事理の業因はその行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとなさず。余が如き頑魯の者にあえてせんや。この故に念仏の一門によつていささか経論の要文を集む。これをひらきこれを修するに覚り易く行じ易し云々。

わが心にぞたずねいりぬる

夜もすがら仏の道をたずねればわが心にぞ尋ね入りぬるとの僧都の御歌は人々に大きな指標をのこされたのであります。アウガスチンも「外に出るな、あなた自身に立ちかえれ、内なる人にこそ真理は宿る」と申しています。中国の詩にも、尽日春を尋ねて雲のかかった岡の上も踏みあるいたが遂に空しかつた。疲れて我家に帰り、庭に咲く一輪の梅を拈つて見れば、春はその枝頭にあつた、というものもあります。

私は親鸞聖人をお慕ひして、御旧跡やら御著書、御絵像、御真筆などをあざりましたがそれでは聖人の表面にお会い出来るだけのもどかしさであつた。その時池山先生に「生き生きとした聖人にお目にかかるには、眼を外に向けては駄目、自分自身の内に向けよ、そこに聖人は御一緒して下さる」と教えられ、方向を一転した時、たまにお念仏が喜ばれるにつけては、その一人は親鸞なりとのみ心にふれまたよろこぶ心のおくらぬにつけては、親鸞もこの不審あ

「それ天の下、一法の中はみな四部の衆なり、いずれが親しく、いずれが疎しからん。故にこの書をもって、あえて帰帆に附す。

そもそも本朝にあるもなおその拙さを慚ず、いわんや他郷においておや。しかるに、もと一願をおこせり。たとい讚歎する者あるも、たとい誹謗の者あるも、あわせて我と共に、極楽に往生するの縁を結ばん云々」

とある。宋の皇帝はこの往生要集を御覧になり、非常に心服せられて、はるかに東に向い、南無日本小釈迦源信如來と称えて礼拝されしと伝えらる。

親鸞聖人も教行信証の末文に、「唯仏恩の深きことを念じて人倫のあざけりを恥じず、若しこの書を見聞せん者、信順を因となし、疑謗を縁となして、信樂を願力に彰わし、妙果を安養に顕わさん」と述べられ、さらに「つねに門徒に語りて曰わく、信謗共に因となつて同じく往生浄土の縁を成ず云々」とあるのも、前聖後賢その軌を一つにされるところである。

ここに、信謗をこえてこれを揶めて転成される、仏の広大無辺の徳光を仰ぎ、特に聖人が御晩年に、念仏をそしめる人をもあわれまれた、相對五分五分の世に大いなる光を放たれたお姿、陽光を全分にうけた満月の輝きを拝する。

あとがき

池山先生から「ありそなこと」という題の小説をお聞きした。それは竹馬の友から裏切られ、続いて愛人に背かれて、その悲歎の涙の中から、人生にはどんなことでもありうるのだと肝に銘じ、それ一つで生涯を浮き沈みして行った人の話であった。日本では「ざるべき甚兵衛」とあだ名をつけられた念仏者があることも知った。ありそなことだけでは灰色で明るくないが、本願に摂取せられてはじめて「よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなし」と正視することも出来る。最近、信じきっていた主人が亡きあと、日誌に自分が裏切られている記事を見て苦悩におちている婦人があると聞き、改めてこの小説を思い出した。たのもし本願を知らずにすごす人生の如何にも危いことを省みさせられた。

人生から信仰に入り、信に立つて人生で働かせて頂かれる趣きを近角先生が詳しく述べ下さっているものを頂きました。

池山先生は、歎異抄の悪人とあることを大

阪の学生仏教会で話されたものを御著書から転載いたしました。

長崎で特長ある信の歩みをせられた山本晋道師の畢竟依から、嫁いで行く娘さんに心をこめて送られた儘の言葉を抄出させていただきました。御一読下さい。

井上様は「触光柔軟の願」の仏力によってこわばる心に光を与えて下さる趣きを御一代記開書によってお知らせしました。

西元様は、和歌山の妙慶寺・蘭田香勲師の御法要に参詣され、師の徳香を御照介下さいました。又近角常観先生の御郷里の寺、西源寺にも参拝された感慨を誌して下さいました。私は常音先生の御在世の時、お参りいたしました時「兄は父から肉体も貰い、信心も受けただので、父のお墓へお骨を納めてくれるように、と云い遺しましたので、そうしました。私もそこへ入ります」と聞かされました。大きな新しいお墓碑を想像していた私には大きなお誂めをうけました。又その時、鮎寿司を御馳走して下さいたことも昨日の事のように思い浮かびます。

木村様は樹心社刊行の榎本さんの詩集「難度」を読まれて「スバラシイ円熟境の詩ばかり」と絶讃していられます。

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り二丁目下車、東入ル三

筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小椋町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く)尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円(送共)
一 年 一六〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花 田 正 夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 坂 部 光 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行 所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四 五七